

りんどう極早生品種の全茎収穫栽培による露地7月上旬出し作型

山形県農業総合研究センター園芸試験場

研究のねらい

りんどうの慣行栽培では、立茎数を1株当たり7本に仕立て、5本を収穫し、残り2本を株養成のために残している。この株養成分の花茎も含めて全茎を収穫できれば、収量が増加する。そこで、全茎を収穫しながら次年度の株養成も可能な露地7月上旬出しの多収技術を確立した。

研究の成果

- ① りんどう極早生品種における全茎収穫栽培を用いた露地7月上旬出し作型には、「スカイブルーながの早生」の適応性が高い。全茎収穫栽培は、慣行栽培と比較して、収穫盛期が3~7日早まり、切り花長50~60cm/着花3段以上の規格を中心に商品花収量は3~8割増加し、10a当たりの所得は400千円前後が見込まれる(図1)。
- ② 全茎収穫栽培を用いた露地7月上旬出し作型(新盆向け出荷)の栽培体系は以下のとおりである。
 - ア 定植1年目は慣行栽培と同様に管理する。定植2年目から、草丈20~30cm時に生育良好な茎を、1株当たり10本を目安に残し、他は摘除する。収穫までは慣行栽培と同様に管理し、収穫可能な花茎を順次地際から10cm程度残して折り取り、全茎収穫する(図2)。
 - イ 栽培2年目の全茎収穫後、7月中旬を晩限に、ジベレリンの使用基準に従って切株(茎基部や越冬芽)に100ppm液を1株当たり5~10ml散布処理する(図2)。
 - ウ ジベレリン処理後、伸長する茎は慣行栽培と同様に適宜防除し、株養成に活用する(図2)。

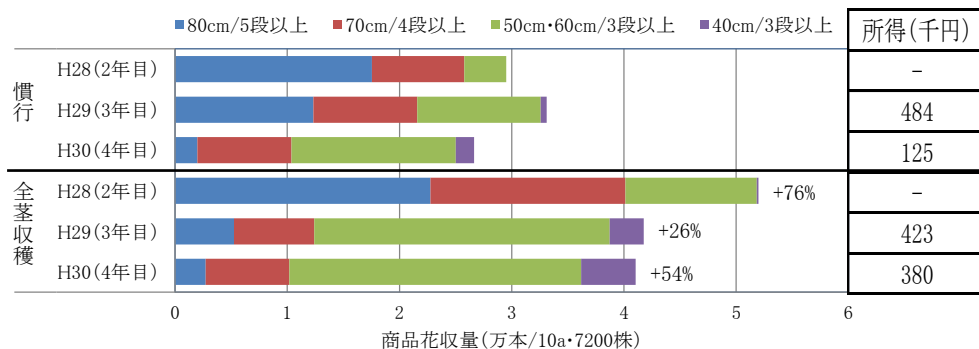


図1 「スカイブルーながの早生」の栽培年次別の10a当たり商品花収量と農家所得試算
(全茎収穫の棒グラフ横の数値は慣行対比の増加率)

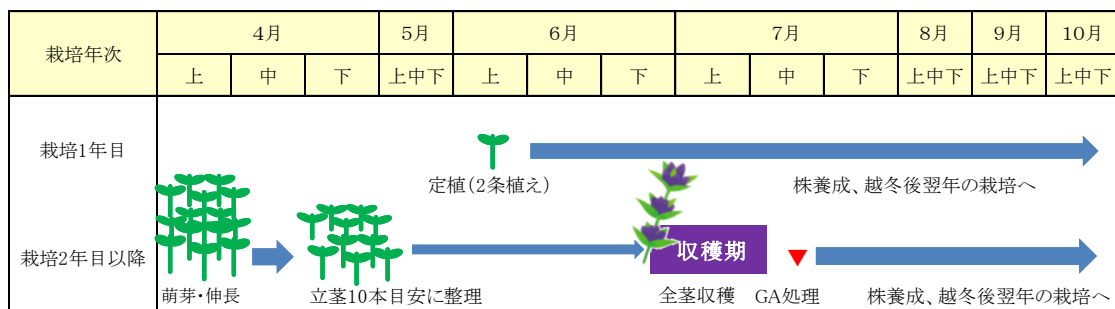


図2 りんどう極早生品種の全茎収穫栽培による露地7月上旬出し作型の栽培暦

問い合わせ先：野菜花き部 TEL:0237-84-4125 e-mail:yengeishi@pref.yamagata.jp